

## 【6】 コーサンビーの破僧事件

[0] 次にコーサンビーの破僧事件について検討したい。コーサンビーの破僧事件とは、釈尊がコーサンビーに滞在されていたときにコーサンビーのサンガに紛争が起こり、釈尊の仲裁にも拘わらずついに破僧に至った、というものである。

[1] これに関する文献資料には次のようなものがある。

[1-1] まずA文献資料を紹介する。

〈1〉 世尊はコーサンビーのゴーシタ園に住されていた。そのとき一人の比丘が罪を犯したが、その比丘が罪を認めなかったので、比丘らは和合を得て (sāmaggiṃ labhitvā) その比丘を罪を認めないことによって挙罪した。しかしその比丘はそれが罪ではないという意見の比丘たちを集め、その挙罪は非法であると主張した。これを1人の比丘が世尊に知らせると、世尊は「比丘サンガは破れた (bhinno bhikkhusaṅgho)」と言われ、挙罪した比丘たちには「破僧のおそれあるときには、挙罪すべからず」と説かれ、挙罪されたほうには「破僧の恐れあるときには罪を認めよ」と説かれた。そして挙罪されたほうは界内において布薩・羯磨をなし、挙罪したほうは界外に出て布薩・羯磨をなしたが、世尊はこの両方を如法とされた。こうして両派の比丘たちは争ったので、一人の比丘が世尊にその比丘たちのところに行ってほしいと要請した。行かれた世尊は「争うな」と諫められたが、一人の非法説比丘は、「世尊よ、待ってください (āgametu)。世尊法主よ、何もしないで現法樂住に住して安樂に過ごしてください (apposukko diṭṭhadhammasukhavihāraṃ saṃyutto viharatu)。この訴訟・討論、争論・諍論は私たちのものですから (mayam etena bhaṇḍanena kalahena viggahena vivādena paññāyissāma)」と言った。世尊は過去世のブラフマダッタの話を話された。「ブラフマダッタはコーサラ王の長寿と戦争し、長壽は破れて逃亡した。やがて子が生まれ長生と名付けた。累が及ぶのを恐れて長生を城外に住せしめた。長壽夫妻はとらえられ殺された。死に際に恨みをもって恨みは消えないと教えた。長生は梵施王に可愛がられるようになり、復讐する機会が訪れたが復讐しなかった。梵施王は奪い取った国土を返し、自分の娘と結婚させた」と。この話を聞いてもサンガは仲直りしなかった。世尊は、コーサンビーを去りバーラカローナカーラガーマ (Bālakaloṇakāragāma) へ行かれ、そこに住むバグ (Bhagu) に会われた。さらにパーチーナヴァンサダーヤ (Pācīnavamsadāya) に向かい、そこに住むアヌルッダ、ナンディヤ、キンビラに説法され、パーリレツヤカ (Pārileyyaka) へ遊行された。そこで独住を望む大象と過ごされた後、舎衛城の祇園精舎に入られた。

コーサンビーの優婆塞たちは、「世尊を悩ませ去らせた」として比丘たちを供養しなくなったので、比丘たちは「世尊の許で和解せん」と舎衛城に向かった。世尊は舍利弗、マハーパジャーパティー、給孤独長者、ヴィサーカー・ミガーラマターたちからの、「彼らにどう対応すべきか」という質問に指示を与え、到着した比丘たちには解羯磨について教示され、僧伽和合が回復された。Vinaya「コーサンビー韃度」(vol. I p.337)

- 〈2〉 釈尊はコーサンビー（拘睺弥）に住された。そのときある比丘が罪を犯して、それを認めなかったので、比丘たちは和合して不見罪羯磨を行った。その比丘はその羯磨は非法であるとして、朋党をつれて戻ってきて、別部説戒羯磨を行った。拳罪羯磨を行った比丘たちはこれを世尊に訴えた。世尊は「此癡人破僧」と言われ、拳罪した比丘たちには「破僧のおそれあるときには、拳罪すべからず」と説かれ、拳罪されたほうには「破僧の恐れあるときには罪を認めよ」と説かれた。そして過去世の長生王の物語によって忍辱を説いて調停を試みたが比丘らはそれを聞かず、「世尊。但自安住。如來是法主。諸比丘鬪諍事自當知」と言った。釈尊は喜びたまわず、ひそかに神足力をもってコーサンビーより舎衛城に還った。それを知って人々はコーサンビーの比丘らに供養しなかった。そこで彼らは釈尊の後を追って舎衛城に来た。舍利弗、摩訶波闍波提、阿難那咤（給孤独）、毘舍佉無夷羅母が、釈尊に彼らに対する処遇を尋ねた。ウパーリは非法の僧伽和合と如法の僧伽和合について質問した。『四分律』「拘睺彌捷度」（大正 22 p.879 中～884 下）
- 〈3〉（説戒捷度の一番最後に）その時拘睺彌の衆僧破れて二部となった。諸比丘は舎衛において和合せんとした。仏は「自今已去、白し已りて然る後に和合することを聴す」と制された。『四分律』「説戒捷度」（大正 22 p.830 上）
- 〈4〉 釈尊は拘舎弥城に住されていた。そのときある比丘が犯戒したが、その自覚がなかったので、有犯であるとする比丘たちは不見罪羯磨を行った。しかし拳された比丘はこれは非法であるとして助伴党を求めた。その時世尊は僧がすでに破したことを知られて、拳罪した比丘たちには「破僧のおそれあるときには、拳罪すべからず」と説かれ、拳罪されたほうには「破僧の恐れあるときには罪を認めよ」と説かれた。しかし比丘たちは争いをやめず、調停しようとする世尊に、「世尊。願安隱住佛雖法主我等自知」と言った。釈尊は過去世の長寿王の物語によって忍辱を説いて調停を試みられたが、なおも「世尊。願安隱住佛雖法主我等自知之」というので、釈尊は神力で飛んで波羅聚落（Pārileyyaka? Bālakaloṇakāragāma?）に至り、跋陀婆羅（Bhaddasāla）樹下に住され、そこで他の諸象に悩まされた象の奉仕を受けた。その後、釈尊は跋陀婆羅より舎衛城祇園精舎に移られた。事を知ったコーサンビーの人々が比丘への供養を止めてしまった。反省した比丘らがやってきて、舍利弗、摩訶波闍波提、給孤独、毘舍佉母、阿難が、釈尊に彼らへの処遇を尋ねた。ウパーリはどんな場合に拳罪してよいかと質問した。『五分律』「羯磨法」（大正 22 p.158 下～161 上）
- 〈5〉 釈尊は俱舎弥に住されていた。そのときある比丘が犯戒して、それを自覚しなかった。そこで比丘たちは不見擯羯磨を行った。その比丘は味方呼び集めて不如法であると主張した。こうして争いが起こり、僧破し、僧諍し、僧別し、僧異して破僧の因縁となり、分れて両部となった。これを知られた世尊は拳罪した比丘たちには「破僧のおそれあるときには、拳罪すべからず」と説かれ、拳罪されたほうには「破僧の恐れあるときには罪を認めよ」と説かれた。このような調停にも比丘たちは「世尊法王。且置。彼人惱我云何不報」といった。そこで世尊は長寿王經（内容が省略されている）を説き終えると座から起って、支提（Ceti）国に往かれ、それから舎衛城に至られた。

事を知った俱舎弥の人々が比丘への供養を止めてしまったので、反省した比丘らは舎衛城の釈尊のところへ赴いた。舍利弗、目連、阿那律、難提、金毘羅、摩訶波闍波提等比丘尼ら、波斯匿王、須達多等の大居士たち、末利夫人等の居士婦たちが、釈尊に俱舎弥の比丘らに対する処遇を尋ねた。『十誦律』「俱舎彌法」（大正 23 p.214 上～216 下）

- 〈6〉世尊は舎衛城におられた。時に拘睺弥に二部の大衆があった。第1の師は清論で、共行弟子は雹口、依止弟子は頭頭伽、優婆塞弟子は頭磨、檀越は優陀耶王、優婆夷弟子は舎彌夫人、後宮青衣弟子は頻頭摩邏であり、第2の師は善釈で、共行弟子は垢雹、依止弟子は吒伽、優婆塞弟子は無烟、檀越は渠師羅居士、優婆夷弟子は魔捷提女で名は阿窣波磨、後宮青衣弟子は波駄摩邏人、そして各々に500人の比丘と比丘尼、優婆塞、優婆夷があった。あるとき第1の師が厠に入って用をたした後、水を用いようとしたが虫がいたので、器の上に草をのせて使った。後から来た第2の師の依止弟子がこれを見て非難したので、争いとなった。そこで一人の比丘が舎衛城にやって来て、争いを滅してほしいと願い出た。世尊は優波離に「行って、この争いを多覓毘尼滅で解決せよ」と命じられた。『僧祇律』「単提 004」（大正 22 p.333 下～334 中）
- 〈7〉世尊はコーサンビーのゴーシタ園におられた。コーサンビーの諸比丘は論争し、不和となり、和解することがなかった。そこで世尊は比丘らを集め、和合のための六法（慈しみのある身の行為、慈しみのある語の行為、慈しみのある意の行為、正法、戒、正見）を説かれた。*MN.048 Kosambiya-s.* (vol. I p.320)
- 〈8〉釈尊はコーサンビーのゴーシタ園に住されていた。そのときコーサンビーの諸比丘が争った。1人の比丘が釈尊に調停を願い出たので、釈尊はそこに行かれたが、比丘らは「世尊よ、待ってください (*āgametu*)。世尊法主よ、何もしないで現法樂住に住して安樂に過ごしてください (*apossukko diṭṭhadhammasukhavihāraṃ samyutto viharatu*)。この訴訟・討論、争論・諍論は私たちのものですから (*mayam etena bhaṇḍanena kalahena viggahena vivādena paññāyissāma*)」と言った。釈尊はコーサンビーに乞食に出て帰られると食後に偈を述べてからパーラカローナカーラ村 (*Bālakaloṇakāragāma*) に赴かれて、そこでバグ (*Bhagu*) に会い安否を尋ねて説法された。それからパーチーナヴァンサダーヤ (*Pācīnavamsadāya*) に赴かれた。そこにはアヌルッダ (*Anuruddha*) ・ナンディヤ (*Nandiya*) ・キンピラ (*Kimbila*) が住していて、守園者が釈尊の来るのを見て「3人の邪魔をするな」と言って入れまいとしたが、アヌルッダが彼にそれが釈尊であることを告げ、ナンディヤとキンピラを呼んで釈尊を迎えた。釈尊はアヌルッダに、「あなたたちは和合して暮らしていますか」と問いかけられ、説法された。アヌルッダは世尊の教えを随喜した。*MN.128 Upakkilesa-s.* (隨煩惱經 vol.III p.152)
- 〈9〉釈尊は拘舎彌の瞿師羅園に住されていた。そのとき拘舎彌の諸比丘が共に争ったので、止めるために過去世の長寿王の物語を説かれた。それから如意足をもって空を飛んで婆羅樓羅村 (*Bālakaloṇakāragāma*) に赴いて、尊者婆咎釋家子に説法した後、護寺林 (*Rakkhitavanasaṇḍa*) に赴いて一樹下に坐して象の供養を受けられ、護寺林から般那蔓闍寺林 (*Pācīnavamsadāya*) に行かれて、阿那律陀、難提、金毘羅に会い、

「あなたたちは和合して安楽に暮らしているか」と尋ねられた後に、説法された。

『中阿含』072「長寿王本起経」（大正01 p.532下～536下）

〈10〉 釈尊はコーサンビーのゴーシタ園に住されていた<sup>(1)</sup>。あるとき、コーサンビーで乞食されて還った後、侍者にも告げず独りで出て行かれた。ある比丘がアーナンダのところに来て、釈尊が独りで出て行かれたことを告げた。アーナンダは「そういう時には誰もついていってはならない」と注意した。釈尊は遊行されてパーリレツヤカ村のバッダサーラ樹下（Pārileyyaka Bhaddasālamūla）に住された。その時、多くの比丘が阿難のところに来て、「久しく世尊にお会いしていない」と言うので、阿難は皆とともにパーリレツヤカ村に赴いて、釈尊より説法を聞いた<sup>(2)</sup>。SN.022-081（vol. III p.094～095）

(1) 『雑阿含』057（大正02 p.013下）；一時仏在舍衛国祇樹給孤独園……。爾時世尊遊行北至半闍国波陀聚樂……。住一跋陀薩羅樹下。

(2) 破僧には触れられていないが、その後のことであると判断して資料に加えた。

〈11〉 仏は拘深城の瞿師羅園に住しておられた。そのとき拘深の比丘は鬪争を好み、諸の悪行を犯し、面（まのあた）りに相談説し、ある時は刀杖相加えた。世尊は彼らのところに行って、鬪争するなと諫められた。しかし彼らは、「唯願世尊。勿憂此事我當自慮此理。如此過狀。自識其罪」「此是我等事。世尊勿足慮此事」と言った。世尊は過去世の長寿王の物語を説き戒められるが、「唯願世尊。勿慮此事。我等自當分明此法。世尊雖有此語其事不然」という。そのとき跋耆国に阿那律、難提、金毘羅があり、互いに修行を高めあっていた。世尊は師子国に行かれて<sup>(1)</sup>この三人に会い、その和合して修行するありさまを讃められた。そのとき長寿大將がやって来て、「跋耆大国は快き大利を得た。この三人がいるから」と言った。『増一阿含』024-008（大正02 p.626中～630上）

(1) 文脈からすると跋耆国の一部であろうか。

〈12〉 釈尊はコーサンビーのゴーシタ園に住しておられた。その時世尊は比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・王・大臣・外道とその信者に煩わされていたので独りになりたいと思ひ、コーサンビーの乞食から帰ると、侍者にも告げずにパーリレツヤカに赴き、バッダサーラ樹下に住された。そこで象の供養を受け、偈を説かれた<sup>(1)</sup>。Udāna 004-005（p.041）

(1) 破僧には触れられていないが、その後のことであると判断して資料に加えた。

[1-2] 次にB文献資料を紹介する。

〈1〉 これは世尊が祇園精舎に住しておられたとき、コーサンビーの比丘たちについて話されたものである。

コーサンビーのゴーシタ園に2人の比丘が住んでおり、それぞれ500人の随行者がいた。一人は持律者（vinayadhara）で一人は説法者（dhammakathika）であった。ある日説法者が浴室で手を洗い、容器のなかに残った水をそのままにして出てきた。後に持律者が入って水を見た。持律者はこれを罪だと指摘したところ、説法者は罪と知らなかったといい、持律者は知らなかったのなら罪ではないと言った。しかし自分の弟子たちに、「あの説法者は罪を犯しておきながら罪を知らない」と嘲笑したので、

二派は「罪を知らない」「嘘つき」と互いに争うことになった。

これを聞かれた世尊は和合を指示されたが比丘たちは受け入れず、三度繰り返されて「僧伽は破れた (bhinno bhikkhusaṃgho)」と言われた。世尊は「鶉本生物語 (Laṭukikalātaka)」<sup>(1)</sup> を話されたが、比丘たちは聞きいれず自分たちに任せるよう主張した。そこで世尊はブラフマダッタがバーラーナシーのカーシ王であった時代のコーサラ国王ディーガティッサ (Dightissa) の王子である長寿王子 (Dīghāyukumāra) の物語をされたが、彼らは和合しなかった。世尊は比丘らが町に乞食に出た間に、一人でコーサンビーからバーラカローナカ精舎 (Bālakaḷoṇakārāma) へ行き、バグ (Bhagu) と会って「独り歩きの行法 (ekacārikavatta)」を説かれ、次にパーチーナヴァンサミガダーヤ (Pācīnavamsamigadāya 東竹鹿苑) で3人の若者に「和合して住することの功德 (sāmaggirasānisamsa)」を説かれ、そこからパーリレヤカ (Pārireyyaka) へ向かわれた。その近くの沙羅林の下で、世尊はパーリレヤカ象に給仕されて雨期を過ごされた。

コーサンビーの在家信者たちは、比丘たちが指示を聞かなかったために仏が去られたことを知り、彼らに対する供養を絶った。餓えに困った比丘たちは和解するため世尊の許しを得たいと考えたが、雨期で動けず大変不快な雨期を過ごした。世尊が象に奉仕されて林に住んで居られることが広く知られるようになり、給孤独長者やヴィサーカーたちが阿難に、「世尊に会わせてほしい」とメッセージを送った。500人の比丘たちも、「世尊の口から説法を聞いてから既に久しい、どうか世尊の口から説法を聞かせて欲しい」と阿難に求めた。そこで阿難は比丘たちを連れて迎えに行った。世尊は象と別れ祇園精舎に帰還されると、これを聞いたコーサンビーの鬪争比丘たちは許しを得るためにやって来た。コーサラ国王 (Kosalarāja) は「彼らが私の国に入るのを許さない」といい、給孤独長者も「祇園精舎に入るのを認めない」と言ったが、世尊は賛成されず、彼らに別々の宿舎を用意するよう命じられた。コーサンビーの比丘たちは世尊の足下に跪き許しを乞うた。世尊は自分の戒めを聞かなかった罪を指摘し

ダンマパダの第6偈

私たちはここに自制しなければならぬということを道を異にする人々は知らない。

このことを知る人々に争いは鎮まる。

を唱えられた。 *Dhammapada-A.* (vol. I p.053~65, Burlingame 訳 vol. I p.175~183, 『法句経物語』 p.14 以下)

(1) *Jātaka 357 Laṭukika-J* (vol.III p.174~177)

- (2) 釈尊がコーシャーンビーのゴシラ園 (Ghoṣilārāma) におられたとき、ヴァイシャーリーの諸比丘がコーシャーンビーに来ていて、コーシャーンビーの比丘らとの間に、「水瓶が空であるのを見たものは、水を満たしてあった場所に置いておくか、守寺師に水瓶が空であることを告げるべきである。自分で満たしめせず、守寺師に告げもしなかったら、その人は配慮が足りない。配慮が足りないので、我々はその人に波逸提の罪を宣告する」という決まりをめぐって不和が生じた。調停できなかった釈尊は、コーシャーンビーから舎衛城の祇園精舎へ赴かれた。この争いは12年間つづき、和解も12年後に舎衛城でなされた。阿難、マハープラジャーパティ・ガウタミー、

アナータピンダダは世尊にコーシャーンビーの比丘らに対する処遇を尋ねた。  
*Mūlasarvāstivādinaya Kauśāmbavastu* (*Gilgit Manuscripts* ed. by Nalinaksha Dutt, vol. III, part 2, First edition, Srinagar, 1942, Second edition, Delhi, 1984, p.173)

- 〈3〉なぜこのような論争が起こったのか。些細な理由によってである。二人の比丘が一つの部屋に住んでいた。持律者 (vinayadhara) と経師 (suttantika) である。……以下資料 〈1〉と同趣旨の話が記される。*MN.-A.* vol. II pp.393~394
- 〈4〉この本生物話は仏が祇園精舎に在された時コーサンビーで紛争を起こしたものについて話されたものである。皆が祇園精舎にやってきて懺悔したとき、仏は彼ら呼んで「お前たちは私の実子、父の与えた教訓を子供が踏みにじるのは宜しくない、……」と長寿王子の物語をされた。*Jātaka 371 Dighitilosala-J.* (vol. III p.211)
- 〈5〉この本生物話は仏がコーサンビー付近のゴーシタ園におられた時、コーサンビーにおいて争っている人々について話されたものである。この闘争事件は *Vinaya* のコーサンビーの一節に出ている話である。*Jātaka 428 Kosambi-J.* (vol. III p.486)
- 〈6〉むかし、拘睺彌の比丘が鬪諍して分かれて二部となり、なかなか解決できなかった。その時世尊は長寿王の話を読かれたが、比丘たちは「佛是法主。且待須臾。我等自知」と言った。世尊はこれを聞いて、12 由旬離れた娑羅林で坐禅された。そのとき一象王が群象から一人離れてやってきたので偈を説かれた。ようやく比丘たちに悔恨を生じたので世尊は六和敬法を説かれ、比丘たちは和合した。『大莊嚴論經』(大正 04 p.304 上~305 中)

[2] 以上がわれわれが収集しえたコーサンビーの破僧に関する A、B 文献におけるすべての資料である。この破僧が起こったときの仏の所在について、A 資料の 〈3〉は明示せず、〈6〉は舎衛城とするが、他の 〈1〉 〈2〉 〈4〉 〈5〉 〈7〉 〈8〉 〈9〉 〈10〉 〈11〉 〈12〉はすべて仏がコーサンビーにおられたとするから、これがもっとも標準的な伝承といえるであろう。またストーリーも仏がコーサンビーにおられたのでなければ辻褄が合わない。したがってこの時にも、明らかに釈尊はコーサンビーに滞在されていたのである。

それではこの破僧はいつ起こったのであろうか。

[2-1] 律蔵文献の「コーサンビー犍度」の主題は、如法説者 (dhammavādin) と非如法説者 (adhammavādin) の基準と、このように全国に散在する個々のサンガに破僧が起こったときには、比丘尼サンガ (bhikkhunisaṃgha) と優婆塞、優婆夷はどのように対処すべきかということであり、また再び和合サンガとなるにはどのような手続きがなされるべきかということであって、したがってこの時点ではすでに比丘尼サンガが成立していなければならない。われわれの本論文を制作している現時点での考えでは、比丘尼サンガの形成は成道 28 年、釈尊 63 歳の時であったということになっているから (1)、したがってこの破僧はこれ以降ということになる。

なお B 文献の 〈2〉は、この和合は事件が起きてから 12 年後としているから、もしそうならこれが発生したのは少なくとも釈尊入滅の 12 年以上前でなければならないことになる。先に書いたように、釈尊が入滅前のもっとも遅くに舎衛城に滞在された可能性は

78歳のときであると考え、それは66歳の時以前ということになり、したがってコーサンビーの破僧の年は釈尊63歳の年から66歳の年までの4年間の中に収まることになる。しかしいったん分かれたサンガが12年もかかって元の鞘に収まるということも考えがたいし、伝承そのものの信憑性もあるから、この伝承は捨てられるべきであろう。

- (1) 「モノグラフ」第10号に掲載した【論文10】「*Mahāpajāpatī Gotamī*の生涯と比丘尼サンガの形成」p.70 参照

[2-2] この破僧の年代についてももうひとつ考えるべきは、提婆達多の破僧との関連である。もしコーサンビーの破僧よりも提婆達多の破僧の方が早ければ、上記資料中のどこかにその痕跡が紛れ込んでいてもよいように思われるが、しかしそういうものは見いだせない。

一方提婆達多の破僧についての記述には、【論文11】「提婆達多 (*Devadatta*) の研究」において詳細に資料を紹介したごとく、その予兆をコーサンビーで聞かれたという記述があり、これはコーサンビーの破僧の方が早かったということを暗示するものではないであろうか。B資料の(2)は、コーサンビーの破僧の一方の当事者がヴァイシャーリーの比丘であったとしている。周知のごとくヴァイシャーリーは第2結集の発端になった紛争の起こったところであって、おそらくそれが投影されているのであろう。提婆達多の破僧の記述の中にこのコーサンビーが登場するのは、破僧といえばコーサンビーとヴェーサーリーというイメージが経典の編集者にあったからと考えられる<sup>(1)</sup>。

そこで念のために釈尊が提婆達多の破僧を聞かれた場所の記述を紹介しておく。その場所にはアンダーラインを施した。なお目連が最初に天子から聞いた場所は破線のアンダーラインを施しておく。

- (1) 世尊はコーサンビーのゴーシタ園に住された。その時もと目連の侍者であったカクダ天子は目連のところに現れて、提婆達多が比丘サンガを乗っ取ろうとする希望を抱いたので、神通力を失ったと告げた。AN. 005-010-100 (vol.III p.122)
- (2) 世尊はアヌピヤからコーサンビーに行かれゴーシタ園に住された。提婆達多は、阿闍世王子が幼くて、将来に吉祥有りということで、近付きなろうと王舎城に行った。阿闍世王子は提婆達多の神通力に喜び、寄進した。提婆達多は「比丘衆の長となろう」として神通力を失った。このことを最近死んで天子となったカクダ天子が、目連に知らせた。目連はこのことを世尊に知らせた。……。世尊はコーサンビーに随意の間住されてから王舎城竹林園に移られた。Vinaya「破僧健度」(vol.II p.184)
- (3) 未生怨は年漸く長大となった。そのとき世尊はコーサンビー国におられた。時に提婆達多は神通力をもって未生怨を信樂させようと思った。命終してほどない迦休天子は目連のところに現れて、これを報告した。目連はこれを世尊に報告した。そのとき提婆達多は阿闍世のところに行って神通を現し、阿闍世の莫大な供養を受けることになった。マガダの王ビンビサーラはこれを知ってそれ以上の供養を世尊にした。『四分律』「僧残010」(大正22 p.591下)
- (4) 世尊はコーサンビーの瞿師羅園に行かれた。そのとき目連は別の住所に住していた。そこに柯佉という憍陣如子であった梵天に生まれた者が現れて、提婆達多のことを報告した。目連はこれを世尊に知らせた。……提婆達多は大衆の前で、「僧伽を自分に譲れ」と釈尊に要求した。『五分律』「僧残010」(大正22 p.018上)

- (5) そのとき目連は支提国迦陵伽盧谷中にいた。以前その弟子であって今は梵天に生まれ変わっている迦扶陀比丘俱羅子が、提婆達多が神通力を失ったことを知らせた。目連は王舎城に現れてこれを世尊に報告した。『十誦律』「調達事」（大正 23 p.257 中）
- (6) 提婆達多は貪心を起こし、神通を失った。このことを梵天に生まれていた迦俱陀比丘が、江狹山恐畏林中にいた目連に知らせた。目連は恐畏林より没して竹林に現れ、世尊に知らせた。『根本有部律』「僧伽伐尸沙 010」（大正 23 p.700 下）
- (7) 提婆達多は貪心を起こし、神通を失った。このことを梵天に生まれていた迦俱陀比丘が、揭伽國膠魚山恐怖鹿林中にいた目連に知らせた。目連は恐怖鹿林より没して王舎城迦蘭鐸迦竹林に現れ、世尊に知らせた。『根本有部律』「破僧事」（大正 24 p.168 下）

以上のように、(5) (6) (7) は破僧の発端が起こったことを聞いた場所を王舎城とするが、(1) (2) (3) (4) はコーサンビーとする。釈尊も同じ王舎城におられて、提婆達多の神通力を失ったという情報を、目連を通してわざわざ天子から聞くという設定はおかしいから、作られた話であるとしても釈尊はコーサンビーにおられたというほうが納得しやすい。

- (1) 後のアショーカ王の治世 (B.C 268~232) においても、この地コーサンビーにおいて破僧が発生していたことは、次のアショーカ王法勅碑文によってもよく知られている。これもコーサンビーと破僧とを結びつける一因となったものと考えられる。
- 「天愛（アショーカ王の別名）はコーサンビーにおける大官に指示する。……和合が命じられた。
- ……僧伽においては認められない。比丘あるいは比丘尼にして僧伽を破るものは、白衣を着せしめて、住处（精舎）でない所に、住せしめなければならない。」（塚本啓祥『アショーカ王碑文』、レグレス文庫、1976.1）

[2-3] またこの「コーサンビー韃度」は全国津々浦々に存在する一つ一つのサンガの、いわば日常的にどこにでも起こりうる破僧についての対処法が定められたものであるが、提婆達多の破僧は「釈尊のサンガ」を乗っ取ろうとした特別のものであって、常識的に考えてもコーサンビーの破僧の方が早いと考えるべきであろう。ということになればこれは提婆達多の破僧よりも先に起こったはずであって、提婆達多の破僧をわれわれは釈尊の 72 歳の時であったと考えている (1) のので、この事件が起きたのは、比丘尼サンガが形成された釈尊 63 歳の年から 72 歳までの 10 年間のいずれかの年ということになる。

- (1) 本「モノグラフ」第 11 号【論文 11】 pp.99~101

[2-4] またコーサンビーのサンガに破僧が起こったのは、コーサンビーに仏教が確固とした根を張った以降であったことが推測される。それはコーサンビーのサンガが破僧した後のコーサンビーの在家信者たちの反応のしかたに如実に現れている。それを律蔵は次のように描写している。

- (1) 釈尊がコーサンビーから去られたのちコーサンビーの優婆塞たちは言った。「これらコーサンビーの比丘達は我等に多く不利を作した。世尊は彼らの為に悩まされて去られた。我等はコーサンビーの比丘等を敬礼すまい、…奉事すまい、供養すまい、来るとも施食を与えまい。そうすれば彼らは去り、あるいは還俗し、あるいは世尊に和



すだろう」。Vinaya

- (2) 時に諸優婆塞は自ら共に制限を作す、「我等衆人はすべて拘睺彌比丘を見ては、起つて迎え、恭敬礼拝問訊語言し、及び衣服飲食病瘦医薬を供養すべからず」と。彼の諸比丘は被挙して住するに似たり。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、国王、大臣、種種の沙門外道、悉く皆遠離してともに語る者有ることなし。彼の諸の鬪諍比丘は遂に利養有ることなし。『四分律』
- (3) 時に優婆塞、優婆夷、国王、大臣、長者居士、外道沙門婆羅門は供養恭敬し尊重賛嘆したので、多く飲食衣服布施を得るも、世尊は著されること無く猶し蓮花のようであった。時に拘舍弥城の諸優婆塞はみな是言を作す、「我等は今大利を失せり、諸比丘が鬪諍を好む故に由りて世尊住されず、当に方便を作して其れを遠く去らしむべし。便ち共に立要す、「復た共語及び施衣食をしない」と。『五分律』
- (4) その時俱舍弥の諸賢者は、仏俱舍弥比丘の鬪諍言語する所を喜ばず、威儀法則を行ずるが故に捨てて他国に詣られたと聞き、是念を作す、「我等応に是の諸比丘を軽賤し敬心を少起すべし」と。是の念を作し已りてすなわち相語りてみな共に軽賤し、復た尊重供養讚歎せず、敬心転た少し。『十誦律』

このようにして在家信者にそっぽを向かれたので、コーサンビーの比丘たちは和解せざるを得なくなったのであって、このようにこの時点では、コーサンビーの仏教は地域社会の中にどっしりと根を下ろしていたのであり、それは初めて釈尊がコーサンビーの地を訪られた時ではありえないということになる。なお上記の資料〈6〉には、破僧した一方の師の檀越として優陀耶王が、優婆夷弟子として舍彌夫人が、そしてもう一方の師の優婆夷弟子として魔捷提女=阿菟波磨がしっかりと組み込まれている。

[2-5] このように考えると、このコーサンビーの破僧は先に述べた最大限4度にわたる釈尊のコーサンビーへの来訪の中のどの時期に相当するのであろうか。4度とは(1)ゴータ園が建立されたとき、(2)ボーディ王子の母親が王子を懐胎したとき、(3)バグガ国でボーディ王子が幼児であったとき、(4)ボーディ王子が成長してバグガ国にコーカナダ宮殿が建設されたときであり、さらにサーガタが龍を退治したときもあるが、これは先に(3)と同じ時期であると考えておいた。そしてもしこの破僧がこれらとはまた別の時期であったとするならばもう1度増えるわけであるが、より詳しい検討は後に譲ることとして、とりあえずこのうちのどれかの時期と重なるとすれば、このなかでは、(1)と(2)の時ではないことは明らかである。なぜなら(1)と(2)はボーディ王子が母親の胎内にいたとき、ないしは乳母の腰に抱かれているときであって、釈尊が78歳になられたときよりも、少なくとも17、8年前、すなわちまだ比丘尼サンガが形成されていない60歳以前でなければならぬからであり、またこの破僧はコーサンビーに初めて仏教がもたらされたとき、あるいはその数年後のことではありえないからである。

[3] なおA文献の中で、パーリ資料である〈1〉と〈8〉は調停に失敗された釈尊はコーサンビーからパーラカローナカーラガマへ行かれ、そこに住むバグに会われたあと、さらにパーチーナヴァンサダーヤに向かい、そこに住むアヌルダ・ナンディヤ・キンピラに説法されたとされている。そして〈1〉はそこからさらにパーリレツヤカへ遊行されたときとされ

る。なお〈11〉は『増一阿含』であるが、そのとき跋耆国に阿那律、難提、金毘羅があり、互いに修行を高めあっていた。世尊は師子国に行かれてこの三人に会ったとされている。跋耆国は普通はVajjiをさし、師子国はセイロン島のことをさすから、地名はまったく相応しないが、状況としてはよく似ており、ある程度は信頼すべき資料というべきであろう。なおパーリレヤカはチーティ国内にあった場所であると考えられる<sup>(1)</sup>。

ところでここに登場するバグとアヌルダ・ナンディヤ・キンピラの4人は、釈迦族の子弟で、阿難や提婆達多と一緒に出家したとされる人物である<sup>(2)</sup>。なお律蔵のコーサンビー毘度資料には阿難は〈10〉に登場するのみで、あまり重要な役割を担ってはいない。なぜここにバグやアヌルダが登場し、阿難の影が薄いのかわからない。

- (1) 【論文5】「モノグラフ」第6号 pp.109～113 参照 後世の雨安居地伝承では、9年目をコーサンビー、10年目をパーリレヤカとするものがあり (Bigandet ; 「9年目の雨安居地をコーサンビーとし、この地は外道多く、マーガンディヤ王妃の扇動もあって、比丘の間で争いが起こった」)、恐らくこれとの関係からとおもわれるが、コーサンビー破僧事件の時期を9～10年とするものがあるが (渡邊照宏『新釈尊伝』(ちくま学芸文庫) p.405)、上記のとおりこれは受け入れがたい。
- (2) 【論文11】「モノグラフ」第11号参照。この3人はしばしば連れ立って修行していたとみられ、関連記事には次のものがある。

文献資料	場所	内容
MN.031	ナーヂカ村ゴーシガサーラ林	和合して修行
中阿含185 (大正01p.729 中)	那摩提瘦牛角娑羅林	
MN.068	コーサラ国ナラカパーナ	梵行を楽しむ
中阿含077 (大正01p.544 中)	娑鷄帝	皆年少新出家学共来入此正法不久
雑阿含035 (大正02p.008 上)	支提竹園精舎	有三正士出家不久、…三正士不起諸漏心得解脱

[4] これまた余談であるが、このコーサンビー毘度においては、釈尊がコーサンビーに滞在されながら、サンガが分裂するのを止められなかったということになっている。ここにはこれらの個々のサンガが、サンガの構成員によって自主的に運営されるべきであるという理念が端的に現れているのであるが、しかし釈尊がこのサンガの一員ではなかったのかという疑問も生じる。「僧中に仏があるか、ないか」という部派仏教時代に至って生じた問題は、主にサンガに布施をすれば仏も受けることになるか否か、だから果報はどうかという視点で語られるが、本質的な問題はこのようなところにあるというべきであろう。

ともかくコーサンビーの破僧においても、提婆達多の破僧においても、それは現象的にはコーサンビーのサンガ、王舎城のサンガの破僧のように描かれていて、少なくとも仏はその一員ではなかったとしなければならぬ。